



石巻 2025 会議

～これからを考える～

2020→2025

コンソーシアム ハグクミ

01 アフターコロナ 見えないリスクと向き合う

実施日：2020年10月09日(金) 場所：IRORI石巻 現地参加者：32名 オンライン視聴回数：644回 (集計期間：2020年10月09日～2021年3月10日)
 タイムテーブル：石巻2025会議の説明 - セッション「見えないリスクと向き合う」



登壇者



荻谷 智大
株式会社
街づくりまほう



鈴木 崇也
ハコブネ。/
株式会社D.I.O



布施 太一
株式会社布施商店



後藤 峻
株式会社
ソーワダイレクト



谷 碧
NPO法人
まちの寄り合い所
うめばたけ



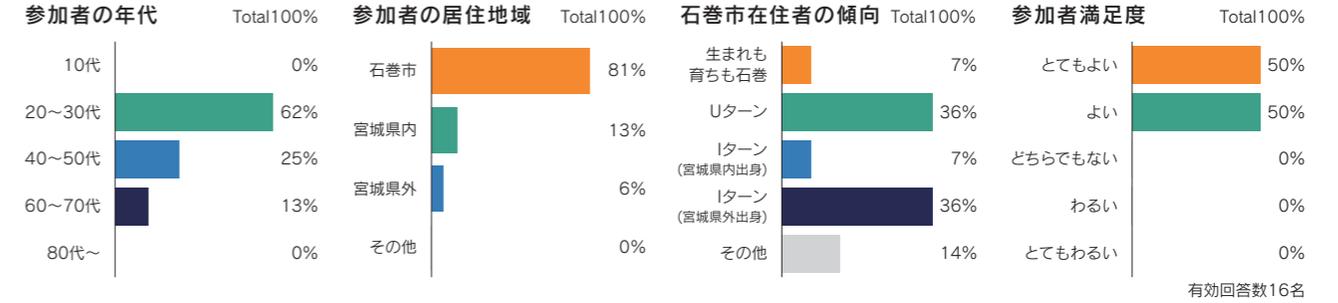
横山 翼
一般社団法人
HitoReha



松村 豪太
一般社団法人
ISHINOMAKI2.0



津田 大介
ジャーナリスト
メディア・アクティビスト



石巻2025会議とは

会議は少し先の未来「2025年」を軸に地域のことを地域で考える試みとして、2017年度から始まりました。今年度は全6回構成、毎回テーマを定め内容に沿ったゲストと一般観覧者が集まり、老若男女・地元よそ者関係なく、意見を出しあい議論を重ねていきました。昨年度との違いは大きく2点あり、1

つは新型コロナ対策です。会場レイアウトを大幅変更、入場制限も行い、代わりにオンライン配信を実施しました。もう1点は全体を通し、ゲストとしてジャーナリストの津田大介氏が参加しました。客観的な目線が入ることでより一層議論の厚みが出た点は今年度の特徴といえます。



見えないリスクと向き合う

第1回「アフターコロナ」では街づくりまほうの荻谷智大氏がテーマリーダーを担当。登壇者にコロナの影響を強く受けている飲食業・宿泊業のキーパーソンから、福祉業まで多様な業種の若手リーダーが集まりました。コロナに対する具体的な対策を話し合う場面で頻出した単語は「オンライン」でした。産業界からは対面が難しい時代に合わせたオンラインアイデアが引き合いに出される一方、福祉業界からはオンライン対応

が難しい「不器用な人」の存在を支える仕組みが必要との指摘もありました。オン・オフの展開が重要との議論の中でリーダーの荻谷氏が「オン・オフに関わらず、本当に必要なものが何かを一人ひとりが見極め、積極的に考えて動いていくことが本質的に重要であり、その中でも特に人とのつながりを大切に保つことがコロナ禍を乗り越え持続していくために必要になる」と締めくくりました。



参加者の声

- 多様な視点からの現状認識とそこから見た未来の予感が聞けたので、とても視野を広げることができた。
- 各職種の方々からの視点でアフターコロナについて語っていただいて、とても面白く、参考になるところも多かった。自分でも何ができるか考えていきたい。
- オンライン会議のようにオンラインが活用される社会は残るくらいには思いましたが、使いこなせる人そうではない人で格差が生まれるというような具体的な話が出て新しい考えが自分にも生まれました。
- 様々な業種の方の話聞いて、今後の参考になりそうなことも多かった。ただただ勉強になった。
- 議論が白熱し、多方面にわたる石巻の現状、未来を考えるきっかけになった。
- 「アフターコロナ」「ウィズコロナ」。ワードでは聞かぬが、そういった先のことを少し考えるきっかけになったと思います。



02 地域経済Part3

地域資源を最大化するために必要なこと

実施日:2020年11月13日(金) 場所:IRORI石巻 現地参加者:34名 オンライン視聴回数:313回(集計期間:2020年11月13日~2021年3月10日)
 タイムテーブル:自己紹介-「石巻の地域資源で推せるものはなにか?」-「地域資源を活かして、どんなビジネスが展開できるか?」



登壇者



松本 裕也
Fisherman JAPAN /
ヤファ一株式会社



津田 祐樹
株式会社
石巻津田水産



山田 廣康
株式会社
ノースジャパンツアーズ



齋藤 祐司
株式会社齋武商店



洪田 大和
有限会社ミノリフーズ



武山 参奨
ふるさと料理 つる屋



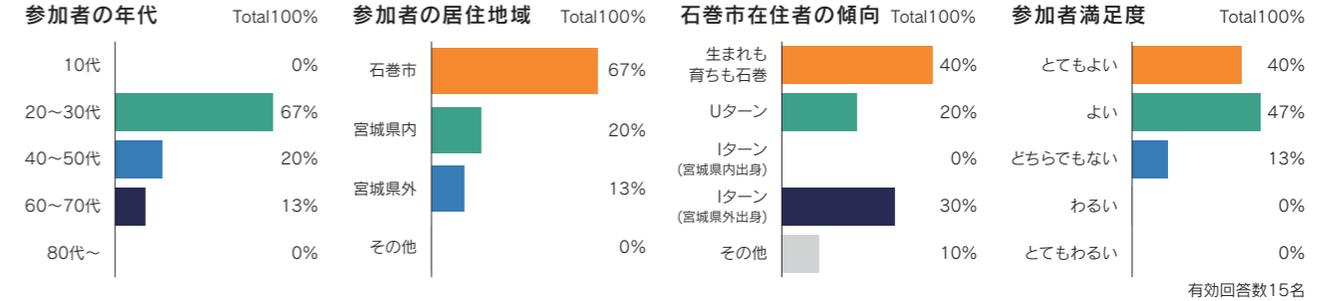
畠山 周平
あかま里山農園



松村 豪太
一般社団法人
ISHINOMAKI2.0



津田 大介
ジャーナリスト
メディア・アクティビスト



地域資源を最大化するために必要なこと

第2回テーマの地域経済はFisherman JAPANの松本裕也氏がテーマリーダーを担当。水産業・農業・飲食など多様な地場産業に携わる事業者が集い、議論を重ねました。

地域経済を向上するためには地域資源の価値を最大化することが必要との前提を元に、前半は推せる地域資源は何か、後半は資源の活用方法についてアイデアを出し合いました。

石巻の地域資源で推せるものはなにか?

問いに対して様々な意見が出ました。中でもサン・ファン館の活用に関して盛り上がりがありました。歴史の凄さもあるが、施設としてのロケーションの良さもあるため、バーベキュー場などの活用も検討すべきとの意見が出ました。また石巻には海苔も魚も寿司

米のササニシキもあり、寿司を作る材料が揃っているとの指摘や海だけではなく川の魚も評価が高いとの声、他にも日本製紙の夜景や最新・安全の加工場、震災という歴史もあるといった意見も出ました。

地域資源を活かして、どんなビジネスが展開できるか?

具体的なアイデアとして一つの自治体で寿司の材料が揃う「シャリコンバレー」として組み合わせた売り方の提案、外国人技能実習生がいることも地域として価値があるため実習生とのコラボ企画「アジアンフェス」の

実施、また素材のポテンシャルはあるためPRの仕方が重要ではないかという指摘など様々な意見が出ました。最後は「できるアイデアをとりあえずやってみることが大事である」という結論に達し、全体がまとまりました。



参加者の声

- 忌憚のない意見が斬新でおもしろかった。
- 既存概念にとらわれず自由に発言ができていた。
- 情報の精度とやっちゃおうというキーワードが心に残りました。
- 話題が意外にも文化的なものを地域資源として捉えており面白かった。
- みなさんが自由な発想で、また熱い思いで話していた。
- 活発、突飛な議論、頭のギアが強制的に入れられた気がします。
- 根幹的、問題提起的な話がもう少しあってもよかったかもしれない。
- 超高齢社会を意識した産業と街づくりについて一緒に考えられればと思う。



03 教育

地元若者×地域「関係人口」を増やすには？

実施日：2020年12月04日(金) 場所：IRORI石巻 現地参加者：41名 オンライン視聴回数：406回 (集計期間：2020年12月04日～2021年3月10日)
 タイムテーブル：自己紹介 - 「石巻の若者(高校生・大学生・Uターン社会人)の本音」 - 「石巻出身の若者の『関リシロ』を増やすためには？」



登壇者



齊藤 誠太郎
一般社団法人
ISHINOMAKI2.0



平塚 冬真
石巻高校 学生/
ブチ朝市企画者



石川 樹
石巻高校 学生/
ブチ朝市企画者



池田 綾花
宮城大学 学生



高橋 倫平
日本体育大学 学生/
認定NPO法人
カタリバ業務委託
スタッフ



山田 はるひ
フリーランス



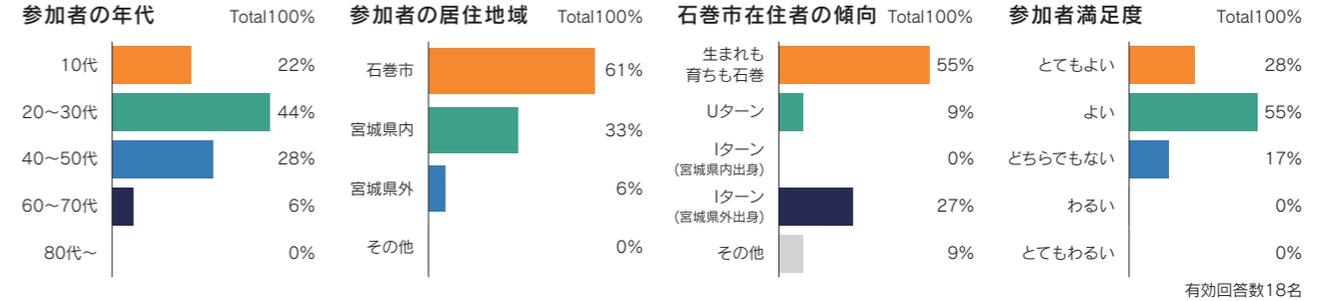
石森 洋史
株式会社
石巻日日新聞社



小野寺 真希
荒屋デザイン



津田 大介
ジャーナリスト
メディア・アクティビスト



石巻の若者(高校生・大学生・Uターン社会人)の本音

テーマリーダーを一般社団法人ISHINOMAKI2.0の齊藤誠太郎氏が担当。登壇者は大人だけではなく現役高校生や大学生など学生の参加も目立つ会になりました。冒頭で齊藤氏が石巻の人口変動についてプレゼンを行い、出生数もダウンしており地域の若者が減少している現状を指摘。その上で地域が地域内外の若者に対して何ができるのかを考えることが本日のテーマだと説明しました。

前半は現役学生の本音を確認。ここでは「石巻はいい町だとは思いますが就職では選択肢が少なく難しい」「一度外に出て自分自身が成長してから戻る」といった意見が出ました。Uターン組からは「石巻に戻りたくても業種が絞られてしまい戻るときのタイミングも難しい」「仕事を楽しむ力、学びや興味関心が地方で働くには必要ではないか」といった声が上がりました。



石巻出身の若者の『関リシロ』を増やすためには？

Uターン組から地元とのつながりが特に大事であるとの指摘があり、そこから地域と若者の『関リシロ』は何か？意見を出しあいました。高校生からは「総合の授業などを通して地域と接する機会が大事ではないか」という意見があり、大学生以降の若者からは「自分自身の興味関心を育てながら、その中で地域にい

るうちに何らかの関わりを持つことが重要。そうなるとやはり小中高でいかに接点を増やすかがポイントになる」といった意見が出ました。最後は齊藤氏が「可能性をどう若者に伝えるか、選ばれる街になるかをもっと考える必要がある」とまとめ、締めくくりました。



参加者の声

- 10代、20代の若者の生の声を聞いてよかったです。
- 自分はどう考えていたかな…と当時の自分を思い出しながら聞いていました。
- 幅広い層の登壇者の方々がテーマに関する内容、それ以外の内容を思い思いに語り合い、いい雰囲気だと感じた。
- 今日がたまたまかですが、話しなれていない人が話しているのがよかったです。
- 教育に対して、学生はどう思っているのかももう少し深掘りして欲しかった。
- 若い人は力がない、教育者に知ってもらうにはよい機会だと思うが教育が変わることを待っているとその人はもう戻ってこないのでは。学校の外でオトナが別のネットワークをたくさん作っておくといふ事があるのかなあ。
- 東京の仕事を持ってくる、東京の会社に持っていかれている仕事を取り返す。みたいな発想が若者の興味ある居場所(働き方)づくりには必要なかなと改めて思いました。



04 Turns (移住定住)

よそ者とジモティーの化学反応

実施日: 2021年01月08日(金) 場所: IRORI石巻 現地参加者: 25名 オンライン視聴回数: 419回 (集計期間: 2021年01月08日~ 3月10日)
 タイムテーブル: 自己紹介-「学生時代に描いていた将来働くイメージ・現在に変わった理由」-「石巻にきた理由・今もいる理由」-「より幸せに働ける地域とはなにか」



登壇者



渡邊 享子
合同会社巻組



宮城 了大
Active Life Lab



小寺 賀子
みち草工房



日野 淳
株式会社口笛書店



津田 成美
合同会社巻組



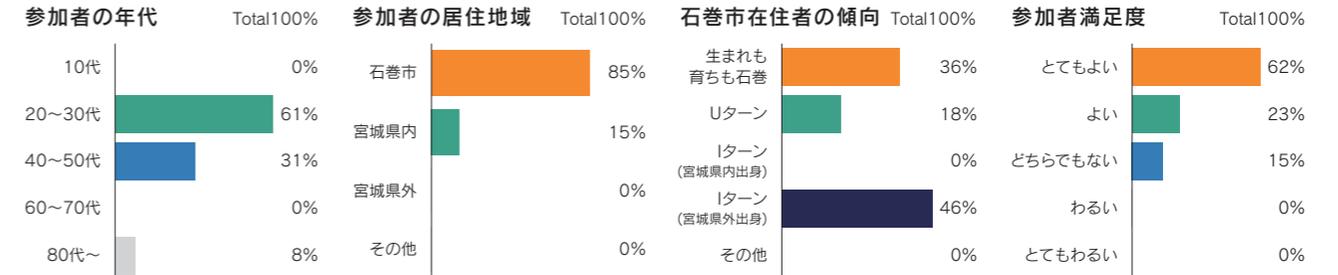
鹿野 颯斗
美術家



樹谷 和子
NPO法人
こども∞感ばにー



大森 晴子
cafe grain



有効回答数13名

学生時代に描いていた将来働くイメージ・現在に変わった理由

テーマリーダーを合同会社巻組の渡邊享子氏が担当。登壇者は生まれも育ちも石巻の若者(この会ではジモティーと表現)、Uターン、Iターンで石巻に住む方々が集まりました。まずはじめにジモティーやUターンに向けて学生時代の石巻のイメージについて確認。昔の石巻、特に街なかには特別感があり古着屋も

たくさんありオシャレだったという意見が出た一方で、将来は石巻から出たい、働くというイメージが持てなかったという意見もありました。今いる理由としては高校での経験が繋がっているという意見や家庭内での必然性、震災をきっかけに地元のためになることをしようと戻ったという話も出ました。



石巻にきた理由・今もいる理由

そしてIターンに対して今も石巻にいる理由を確認。彼氏を追い石巻に来てみたところ、住みやすく友達もできやすい環境で今もいるという意見やボランティアをきっかけに

つながりができたからという意見もありました。また、多様性があり、やりたいことにチャレンジができる点を理由に上げる声もありました。



幸せに働ける地域とはなにか

議論の中で「きっかけ」がキーワードになっている点を確認。その上でリーダーの渡邊氏が「地域に戻るのも移住するのもきっかけ

が大切。良い方向にまち・人・環境が変化していくことは様々な人が地域を好きになれる理由になる」と話し、議論がまとまりました。

参加者の声

- 明るく楽しくフラットでした。
- 石巻を選んでもらうためのヒントをいろいろ見つけられた気がします。
- Uターンしてきてから地元で活躍されている方とお話する機会はありませんでしたので、改めてUターン、Iターンなどの深いきっかけをお伺いできてとても良かったです。自分の今後の働き方についても考えるきっかけにもなりました。
- 「苦しさから逃げない」という言葉が身に染みました。
- UIターン、それぞれの方の石巻にきた理由、いる理由、熱意を聞いて素直に楽しかったです。
- 発見があるのもよかった。もしくはみんなで共有できる、課題みたいなものがあれば。
- 話が広がりそうなので、広がらない。(広げられないのは)人数が多いからなのではないかと思った。



05 文化Part3

文化の未来を考える

実施日: 2021年02月12日(金) 場所: IRORI石巻 現地参加者: 30名 オンライン視聴回数: 353回 (集計期間: 2021年02月12日~ 3月10日)
 タイムテーブル: 自己紹介 - 「文化の理想とは何か」 - 「理想と現状のギャップを埋めるために何が必要か」



登壇者



都甲 マリ子
演出家/
パフォーマー



LIBOO
シンガーソングライター



近江 瞬
歌人



有馬 かおる
美術家/
ART DRUG CENTER



阿部 和枝
石巻市文化協会



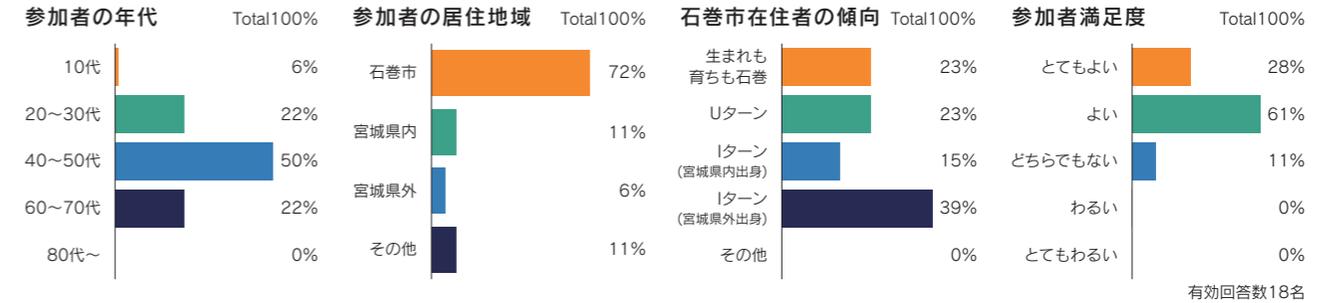
金田 政和
石巻市文化協会



志村 春海
Reborn-Art Festival



津田 大介
ジャーナリスト
メディア・アクティビスト



文化の理想とは何か

第5回「文化」のテーマリーダーは演出家の都甲マリ子氏が担当。登壇者は文化に関係する各分野のスペシャリストが集まり議論を重ねました。前半は理想や課題について意見を出し合う展開に。「個々人でバラバラに活動するよりも繋がりをもった活動の方が

面として伝わりやすくなる」「継続が大切でありそのためには楽しみながらモチベーションを維持することが重要」「継続には金銭的な課題がある」「地域の課題として文化的な空気感が薄い」といった多方面の意見が集まりました。



理想と現状のギャップを埋めるために何が必要か

後半は具体的なアイデアを出し合いました。「つながりを持ち情報を多面的に伝えるためにはまちづくりをしている街づくりまほんの役割が重要ではないか」といった意見、「継続するためには裏方の存在も不可欠であり育成が必要」「雰囲気を生むには口にしていくことも大事、そのためには個々人の発

信も必要になる」といった指摘も生まれました。最後にリーダーである都甲氏が「みんなが様々なことを考えるが中々アクションにはつながらない、必要だと思ったときに立ち上げる人が増えるように継続して耕していきましょう」と締めくくりました。



参加者の声

- 話がクロスオーバーして良いと思った。
- 多様な価値を聞き、きっかけになりました。
- まとめずそれぞれが流れていくようにそれぞれが耕していけば面ができると思います。
- 石巻のこれからを考える、未来思考の「語り場」をうれしく思いました。
- 石巻で文化活動をされている人たちの多様なジャンルや、関わり方(趣味や楽しみやプロや裏方など)が可視化されて、石巻の文化状況がリアリティを持って感じられました。
- 石巻の文化をどうにか盛り上げていきたい人達の想い、今後の課題が見えてきた感じ。YouTube配信もよかった。話し足りない感じはあった。
- その時、その場、その時代と切り結びながら様々な文化があるのかなあ。時代と離れた文化はないように思う。その時代と切り結んだ文化は決して古くはならない。
- 「おもしろいことができる」「(若い人に)伝えたい何か」はあるけど、それを必要な人につなぐ力が弱いとみんなの問題共有できてよかったです。



06 ポスト311 震災復興、その先に何があるのか

実施日：2021年03月05日(金) 場所：IRORI石巻 現地参加者：25名 オンライン視聴回数：286回(集計期間：2021年03月05日～3月10日)
 タイムテーブル：自己紹介 - 今年度開催テーマの振り返り - 「311と新型コロナの共通性」 - 「復興期間の再定義、その先に何があるのか」



登壇者



松村 豪太
一般社団法人
ISHINOMAKI2.0



津田 大介
ジャーナリスト/
メディア・
アクティビスト



荻谷 智大
株式会社
街づくりまほほう



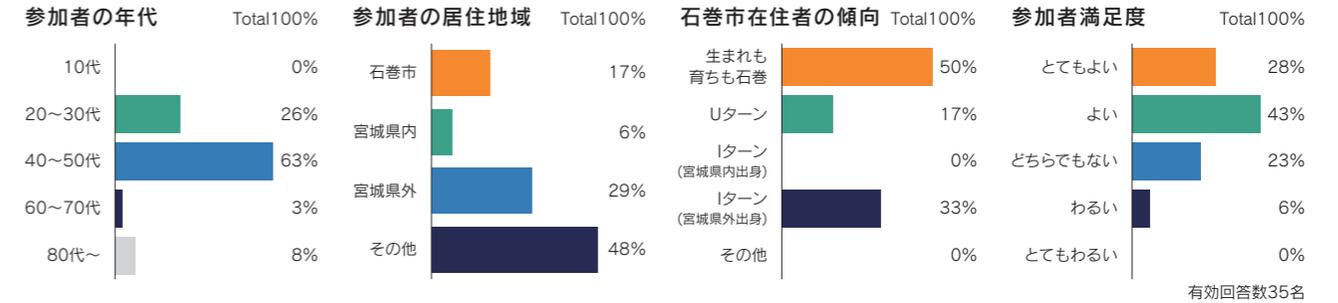
斉藤 誠太郎
一般社団法人
ISHINOMAKI2.0



渡邊 享子
合同会社巻組



都甲 マリ子
演出家/パフォーマー



今年度の振り返り

最終回はISHINOMAKI2.0の松村豪太氏がリーダーを担当。特別ゲストとしてジャーナリストの津田大介氏も現地参加しました。前

半は今年度開催したテーマの振り返りを各テーマリーダーとともに行いました。



復興期間の再定義、その先に何があるのか

後半のセッションでは登壇者だけではなく会場も巻き込んで議論をしました。東日本大震災と新型コロナの共通の課題を確認した上で、これからの地域をよりよくしていくためのアイデアを出し合う展開に。津田氏は「他の地域よりもプレイヤーが多くその点は今後10年の強み」と指摘。これを受け会場からは「プレイヤーの問題ではなく受け手が無関心な点が課題」「関心のない文化をどう興味を持たれるかを考える必要がある」と意見

が出ました。さらに「石巻をどうするか?という話に若者が参加しないのはそもそも石巻を視野に考えていない」との指摘があり、「若者も巻き込み街をどうするか考えるには楽しくワクワクする話をすべきだ」といった意見も出ました。「全体で共通のゴールを準備することも大事だが、隙間がある活動を応援する仕組み」といった話も生まれ、他にも無関心に対するアプローチと更なるアクションを積み重ねるための意見を出しあいました。



参加者の声

- 若い人たちの体験を聞くのは貴重な機会。何より意見を発言する場があることが嬉しい。
- 愛する石巻について石巻内外の方で議論いただいていることだけで尊いです。
- 震災後に移住された方々も含めて復興についていろいろと考えてくださっていて、とても素晴らしい会だと思いました。
- パネリストのみならず、会場の参加者のみならずも悩みながら真剣に未来を考えている様子がよく伝わってきました。
- 課題解決のフェーズがあればもっと良い。
- 論じ、語り継ぎ、耕し続ける。街の灯りであって欲しい。
- こうした場を動かしていること自体よい。今すぐではなくても今後効果があらわれることを期待できる。これからである。
- ざっくばらんにそれぞれの立場や視座から話し合えることは、石巻市に住む人々を誰も排除することのないミライへつなげていくための、めんどろだけが必要なプロセス。
- 当たり障りない村度な空気を感じる。





■津田大介さんのコメント

震災が起きてから石巻は被災地がどこまで復興しているのか理解する自分にとって重要な「ものさし」であったように思います。これだけインフラとボランティアなど外部からのサポートが充実している石巻できちんと復興できなかったら、ほかの自治体は厳しいだろうとも思っていました。そうした思いがあったからこそ、外部の人間からは石巻の復興の歩みが遅いように見えるときもあり、もどかしさも抱えていました。しかし、今回石巻2025会議に参加して、そうしたもどかしい印象が変わりました。もどかしさは復興に携わっている皆さんが抱えている感情でしょうが、石巻で活躍している皆さんはきちんとその感情を飼い慣らしたうえで、それでも自分たちのできることを自分たちの持ち場でやろうとしている。民主主義というのは常に面倒くさいものですが、10年の時を経て、石巻の人たちはその面倒くささ込みでここから復興してやるという強い気持ちを持っているのだと感じました。準備段階が終わった石巻で今後10年どうステップアップしていくのか見るのが楽しみです。



■終わりに

「アフターコロナ」から始まった今年度の2025会議は、最終回の「ポスト311」までを通じて、一つの物語が見えてこないかという期待をもって臨みました。各回リアルとオンラインのハイブリッドで行った「ニューノーマル」な運営でしたが、配信については震災ボランティアをきっかけに移住し、配信サービス業を起業したローカルベンチャーの方に協力いただきました。COVID-19は様々な制約をもたらしましたが、その制約を乗り越えるための工夫は、この感染症が無くてはもいずれ辿りついたであろう進化なのだと思います。そういう意味でCOVID-19は進化のスピードを速めたのであって、それは10年前の東日本大震災についても言えると思います。石巻2025会議は5年間に渡る移住定住推進事業の一環として実施しており、同事業は今年が最終年度、いったん2025会議も区切りをつけることとなります。しかし、各回でみられた「名場面」の数々に、どんな形であれ次の2025会議を見たい・参加したいという思いが既にふつと湧いています。



コンソーシアム ハグクミ 代表 松村 豪太

石巻2025会議2020年度報告書
2021年3月31日 第1刷

編集
三上 和仁 (合同会社デザインナギ)

デザイン・撮影
渡邊 樹恵子 (合同会社デザインナギ)

撮影
山田 真優美

議事録
遠藤 匠 (一般社団法人イトナブ石巻)

グラフィックレコーディング
山内 楓花 (一般社団法人ISHINOMAKI2.0)
佐藤 優花 (合同会社巻組)

発行
コンソーシアム ハグクミ
令和2年度石巻市スマートな地域資源活用創造事業

連絡先
一般社団法人ISHINOMAKI2.0
〒986-0822 宮城県石巻市中央二丁目10-2
TEL:0225-90-4982 FAX:0225-90-4983
<https://ishinomaki-iju.com/>
navi@ishinomaki2.com

コンソーシアム ハグクミ
一般社団法人ISHINOMAKI2.0、一般社団法人イトナブ石巻、合同会社巻組、一般社団法人石巻観光協会の4社によるコンソーシアム。
移住・定住の促進、ローカルベンチャーの推進、空き家活用、地域の情報発信など、多岐に渡る事業を展開している。
国内10以上の自治体に参加する「ローカルベンチャー推進協議会」の石巻事務局を務める。

◆取り扱いについて
本書の内容の一部あるいは全部を無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載は、著作権上認められている場合を除き、禁じられています。
本書のデータを引用する場合は、必ず出典を明記いただき、ハグクミまでお知らせください。